

令和 5 年 10 月 27 日現在

機関番号：32651

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K12596

研究課題名(和文)独立型訪問看護ステーション看護師による精神障害者の退院直後集中支援モデルの開発

研究課題名(英文)Nursing support model of post-discharge support for persons with mental illness

研究代表者

嶋澤 順子(Shimasawa, Junko)

東京慈恵会医科大学・医学部・教授

研究者番号：00331348

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：精神障害者支援実績のある訪問看護ステーション看護師による精神障害者の退院直後期間の集中支援内容を明らかにすることを目的に研究を行った。研究デザインは記述的質的研究であり、調査対象者は、精神障害者支援実績のある訪問看護ステーション看護師5名であった。訪問看護師は、支援開始時に先ず入退院における時間経過における病状変化を前提に、悪化の兆候や自己管理能力を見極めており、病状の安定を最優先した支援であり、生活環境、家族との関係性、生活の拡がりにおいて本人が持ちうる生活の有り様を尊重する支援、支援チームによる支援体制や主治医と協働して治療に関わる支援を見出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

精神障害者の退院後の集中支援の成果を明らかにすることで、その重要性を提示すること、訪問看護の役割を明確にすることが本研究の学術的成果であり社会的意義であると考えられる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to examine the intensive support provided by visiting nurses from a home care station with a track record in supporting individuals with mental disabilities during the immediate post-discharge period. The research design employed a descriptive qualitative approach, and the study subjects consisted of five visiting nurses from the home care station who had experience in supporting individuals with mental disabilities. The visiting nurses began their support by first considering the progression of the illness during the hospitalization and discharge periods, identifying signs of deterioration and evaluating the individual's self-management abilities. Their support prioritized the stabilization of the individual's condition and encompassed the following aspects: respecting the individual's preferred way of life regarding their living environment, relationships with family members, and expansion of daily activities.

研究分野：地域看護学

キーワード：在宅精神障害者 訪問看護師 退院後集中支援

## 訪問看護ステーション看護師による精神障害者の退院直後集中支援内容

### 1. 研究開始当初の背景

わが国の精神保健医療福祉の改革ビジョンが示す入院医療中心から地域生活中心へという理念推進の下 精神科病院の在院患者数は、年間 3,000~4,000 人ずつ減少している。特に、在院患者の約 7 割である統合失調症圏と気分障害は微減しており、統合失調症、気分障害患者の地域移行が進んでいるといえる(精神保健福祉資料 平成 25 年結果概要)。在院日数も年々減少しており、特に新規入院患者は 10 か月以内に退院している。

入院患者の地域移行促進に併せて、精神障害者の退院支援に関する研究が蓄積されている。受持看護師による長期入院患者への退院支援に関する研究(大熊 2014)、地域移支援事業を活用した退院支援に関する研究(松井 2012, 高田 2013)など、退院に向けた患者への動機づけや、シームレスな地域生活移行のための多職種連携に着目した研究が行われ、病状悪化と再入院を予防するため退院後の支援ニーズに対応できる支援体制の充実が課題として挙がっている。

上記にある退院後の支援ニーズに対応するための環境整備の柱となるサービスの一つに訪問看護がある。2002 年の精神保健福祉法の改正および 2006 年の障害者自立支援法施行、さらに精神科訪問看護基本療養費の新設を経て、精神科訪問看護にはその普及と充実へのニーズが急速に高まっているが、供給状態は十分ではない。そのため、精神科病院に併設している訪問看護ではない独立型訪問看護ステーションからの支援は、多様な医療機関から退院し通院しながら地域生活を再開する精神障害者が利用する点において、その機能が期待されていると考える。精神障害者支援における訪問看護援助に関する研究は、精神科訪問看護で提供されるケア内容を類型化した研究(角田 2012)や家族ケアの実施状況に関する研究(瀬戸谷 2008)、利用者の対人関係拡大への介入を分析した研究(中井 2012)などがあり、訪問看護支援内容を検討・記述した研究は蓄積されつつある。また、医療観察法による通院医療患者に対する訪問看護の実態を明らかにした研究(萱間 2012)、重症精神障害者に対する地域精神保健アウトリーチサービスについて ACT (Assertive Community Treatment: 多職種チームによる訪問を中心としたアウトリーチ活動)と訪問看護サービスを比較調査した研究(吉田 2013)など支援困難な在宅精神障害への支援方法を検討した研究が行われている。

これら先行研究の多くは、精神症状や日常生活への多様な支援方法として、ACT や訪問看護サービスの充実と他職種間連携の必要性について述べている。精神障害者の地域生活支援方法について先行研究が蓄積される中、退院後の症状コントロールや地域生活の再スタートなど地域生活継続の課題となる重要な局面での支援方法、また、機能強化が期待される独立型訪問看護ステーションからの支援方法については、研究の蓄積がわずかである。現状の課題に対し、誰がどのようにして支援するのかを詳細に明らかにすることは、再入院を予防し地域生活継続に確実につながる支援方法を追及することであり、急務であると考えられた。

## 2. 研究の目的

精神障害者支援実績のある独立型訪問看護ステーション看護師による精神障害者の退院直後期間の集中支援内容と支援対象者の地域生活実態を調べ、成果が確認できた看護支援方法を明らかにすることである。

### <リサーチクエスチョン>

- 1) 退院直後の支援において、看護師が考えた精神障害者の課題は何か。
- 2) 1) の課題を充たすために、看護師は誰に対し、何をを行ったか。
- 3) 支援対象者である精神障害者の退院時(あるいは退院直前)と退院後概ね6か月以内で、精神障害者の地域生活が安定してきたと訪問看護師が判断した時点における病状および生活能力の客観的評価。
- 4) 3) の結果と看護支援の関連として考えられることは何か。

### <用語の定義>

- 1) 退院直後期間：退院時直前の病棟訪問を含め、退院後約6か月以内で、精神障害者の地域生活が安定してきたと訪問看護師が判断した時点までの期間とする。先行研究において、退院後に訪問頻度回数を増やす特別訪問実施期間が概ね1か月であったが、精神看護学の専門家からの助言を受け、分析対象事例の個別性を鑑み、約6か月以内で、精神障害者の地域生活が安定してきたと訪問看護師が判断した時点までの設定とする。
- 2) 地域生活実態：在宅精神障害者の生活実態として、退院した時点と集中した支援が終了した時点について、BPRS (Brief Psychiatric Rating Scale) , LASMI (精神障害者社会生活評価尺度) , でその病状および生活能力の変化を実態とする。
- 3) 成果が確認できた看護支援：精神障害者の地域生活実態の肯定的変化に対し、何らかの関連があると考えられる訪問看護師のはたらきかけを、成果が確認できた看護支援とする。
- 4) 精神障害者：精神科に通院し薬物治療を継続しており、訪問看護の指示書を受けている者。疾患名および入院期間・回数は問わない。

## 3. 研究の方法

### <研究の位置づけ>

本研究は、独立型訪問看護ステーション看護師による精神障害者の退院直後集中支援モデルを開発することを目的とする研究(【研究1】【研究2】で構成する)の、【研究1】である。【研究1】では、訪問看護師による精神障害者退院直後期間の効果的な支援内容を質的に明らかにし、支援モデル試案を作成する。【研究2】では、【研究1】で明らかになった支援内容に基づく全国訪問看護ステーション調査により支援モデル試案を検証し、支援モデルを完成する。

### <研究方法>

#### 1) 研究デザイン：記述的質的研究

\* 記述的質的研究とは、特定の理論基盤や類型(現象学、行動学、エスノグラフィー、グラウ

ンデッド・セオリーなど)にあてはまらず、質的データの内容分析(content analysis:テーマやパターンの分析)を行う研究(D.F. ポーリット&C.T.ベック 2010)。

## 2) 対象者

精神障害者支援実績のある訪問看護ステーション看護師約 20 名。選定条件は、訪問看護ステーションのうち主として精神障害者への訪問看護を実施しており地域の関係各機関とも連携をとりながら活動を行っている訪問看護ステーションとして精神科訪問看護の研究者および関係者から推挙された事業所の責任者から利用者への効果的な訪問看護を実践している看護師を紹介してもらい、調査協力の了承が得られた者とする。

## 3) 調査方法

研究者と調査対象者が 1 対 1 で半構造化面接調査を行う。

医療機関からの退院直後に集中した支援を要した利用者 1 名への支援を想起してもらい分析対象事例(以下事例)とし、関わりのはじめから退院後か 6 月以内で、精神障害者の地域生活が安定してきたと訪問看護師が判断した時点くらいまでの支援において、支援対象である精神障害者(以下利用者)の課題と、課題に対しどのような支援を誰に行ったかをインタビューガイド(資料 1)を用いて聞く。また、利用者の病状、生活能力は退院時と退院後 6 か月以内で、精神障害者の地域生活が安定してきたと訪問看護師が判断した時点でどのような状態であったと評価したかを評価尺度記入内容から把握する。

なお、利用者の選定においては、対象者と研究者が共に検討した後事業所長の許可を得、可能な限り利用者本人からの承諾を得られた場合、事例とする。

## (1) 調査内容

### 利用者の概要

年齢、性別、家族構成、主治医が所属する医療機関の種別、診断名、罹患年数、従たる診断、入院形態、入院日数、入院回数(頻回入院は発症から 10 回以上とする)、居住形態・環境、収入基盤、利用している公的・民間サービス(外来診療や外来作業療法も含める)

### 支援内容について

- ・関わり開始の時期・理由、訪問回数(週)とその変遷
- ・利用者の精神症状(具体的な症状内容。暴力などの攻撃行動の有無、社会認知障害など)
- ・利用者の課題は何か。
- ・看護師は看護援助として、誰に対して何をどのような意図をもって行ったか。
- ・利用者の病状や生活能力の変化と看護支援の関連は何と考えられるか。

### 利用者の病状、生活能力の評価(評価尺度の記入)

- ・利用者の病状の安定や生活能力はどのような状態であったかを把握する。病状の経過について BPRS (Brief Psychiatric Rating Scale)、生活能力の変化について LASMI (精神障害者社会生活評価尺度)、を用い、看護師が支援者として観察し判断した結果を記入してもらおう。

BPRS および LASMI は、精神疾患患者のリハビリテーションに携わる専門的従事者を評

価者として開発された尺度である。

#### (2) 調査場所

対象者が所属する訪問看護ステーション内相談室等の一室、もしくはスペース

#### (3) 調査期間 2019年9月～12月

#### 4) 分析方法

個々の対象者から得られた情報を集約し、質的記述的に分析する。すなわち、聞き取った内容を意味内容が損なわれないように分節化したものをコードとし、類似性や相違点に着目しながら分類・整理する。支援内容としては、利用者の病状、生活能力の肯定的評価と関連するものを取り挙げる。

分類・整理した内容から、精神障害者の退院直後集中支援モデル試案を作成する。

分析は研究組織のメンバーによる協議のもとで進めるものとする。

### 4. 研究の成果

#### 1) 調査対象者

5か所の訪問看護ステーションの協力を得て、10名の訪問看護師にインタビュー調査を行った

#### 2) 調査結果と考察

訪問看護ステーション看護師による精神障害者の退院直後集中支援の内容は、入退院の時間経過における病状と認識、日常生活、生活環境の影響、家族や他者との関係性をアセスメントし、優先する支援方法の見極めと同意、支援チームによる支援体制づくり、主治医の治療方針の把握と現状に即した提案を行うものであった。

その結果、訪問看護師は、支援開始時に先ず入退院における時間経過における病状変化を前提に、悪化の兆候や自己管理能力を見極めており、病状の安定を最優先した支援であると考えられる。次いで、生活環境、家族との関係性、生活の拡がりにおいて本人が持ちうる生活の有り様を尊重する支援を行っており、地域生活開始の時期において重要であったと考える。支援チームによる支援体制や主治医と協働して治療に関わる支援は、それらを側面から支えるための支援であると考えられる。

#### <参考文献>

萱間真美他(2012): 医療観察法による通院医療患者に対する訪問看護ステーションからの訪問看護の実態, 精神医学, 54(5), 3-12.

角田秋, 柳井晴夫, 他(2012): 精神科訪問看護ケアの類型化の検討 訪問看護ステーションが統合失調症を有する人へ提供するケアの類型化と対象の特性, 日本看護科学会誌, 32(2), 3-12.

瀬戸谷希, 萱間真美, 他(2008): 精神科訪問看護で提供されるケア内容, 日本看護科学学会誌, 28(1), 41-50.

吉田光爾, 瀬戸屋雄太郎, 他(2013): 重症精神障害者に対する地域精神保健アウトリーチサービスにおける機能分化の検討 - 1年後追跡調査から見る支援内容の変化 -, 精神障害とりハビリテーション, 17(1), 39-49.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 嶋澤順子
2. 発表標題 訪問看護ステーション看護師による精神障害者の退院直後集中支援内容
3. 学会等名 第10回日本公衆衛生看護学会学術集会第6回国際保健師ネットワーク学会合同開催（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 嶋澤順子
2. 発表標題 Post-discharge support for persons with mental illness: a nursing research review
3. 学会等名 、 The 4th International Conference on Public Health
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 嶋澤順子
2. 発表標題 Post-discharge support for persons with mental illness: a nursing research review
3. 学会等名 The 4th International Conference on Public Health（国際学会）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	上野 まり  (UENO MARI)  (50323407)	湘南医療大学・保健医療学部看護学科・教授    (32728)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	大澤 真奈美  (OSAWA MANAMI)  (50331335)	群馬県立県民健康科学大学・看護学部・教授     (22304)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関